

大震災への備えについて

1. 先日、日本マンション学会が「大震災に対して、今できる備え」というタイトルで、シンポジウムを開いた。4月に起きた熊本地震の被害実態や東日本大震災での教訓など、5人の方々の報告があり、会場の明治学院大学（東京都港区）の大教室では120人ほどの参加者が熱心に報告に聞き入っていた。

震災への備えは、マスコミなどで取り上げられ、自治体の取り組みも増えてきているが、マンションでの住民の関心や震災への備えは充分とは言えないように思う。それはマンションだけでなく、あるいは日本の社会全体について言えるのかもしれない。

日本は改めて述べるまでもなく世界でトップクラスの地震国である。しかし地震への備えが抜きんでいると言えらるうか。その原因は戦後の日本社会の歩みの中にあるように思う。

第二次世界大戦で大打撃を受けた日本の国土と社会システムは、1950年代から高度成長時期を経て数十年かけて作り上げられてきたが、その間の日本のハード、ソフトの国づくりにおいて、大震災の発生を頭に入れて震災への備えを充分考えてきたかと言えば、疑問が残る。

2. 私はこれまでの70余年の人生において、二度大きな地震に遭遇している。必ずしも被災したというわけではないが、二度とも数千人の死者を出した地震である。一度目は68年前、小学校4年生の時の福井地震で、その頃滋賀県彦根に住んでいて、4時過

ぎだったので学校から帰っていて家に居たが、大きな揺れに驚いて、庭に飛び出したのを覚えている。二度目は1995年の兵庫県南部地震で、当時堺の借家に居て、2階の寝室で明け方の振動に飛び起き、ここが震源地ではないかと思ったほど肝を冷やした。

この2回の大地震の間47年間、私は大きな地震を経験していないのだが、日本全体で見ても死者数千人といった大地震は起こっていない。この40数年の年月は戦後日本社会システムの形成期を含んでいて、この間に大地震がなかったことが大地震への備えを充分なものにしてこなかったのではないかと考えている。現在わが国はこの備えの遅れを取り戻す必要があるのだろう。

3. マンションでは、旧耐震基準のところなどを含んで、震災への対応を管理組合あげて考え、取り組みを行っているところがあるが、考えてないところが多いようだ。どうすれば地震対策を考えるようになるか。

マンションの管理組合は、年に1回ぐらいは総会とか、あるいは他の集りの折にでも災害をテーマとして話し合う機会を持つことが必要だろう。日本のマンションでは長期修繕計画をほとんどのところで作っているが、防災の計画というものも備えるようにしてはどうだろうか。

2016年11月11日

梶浦 恒男

開催報告**大規模改修工事実践講座（工事見学会） 第115回 名谷13団地（10/15）****～生活環境の向上・修繕周期をのぼすマンションの改修工事～**

統括担当の中島幸博主任専門委員（一級建築士）が、調査診断から始まった今回の第3回大規模修繕工事について、修繕工事の仕様選定に必要なコンクリートの中性化深度測定や外壁塗装の付着強度試験、アンケートについて内容と結果の報告をしました。そして将来の大規模修繕を考慮した設計の考え方や工事監理の要点やチェックポイントなどについて説明しました。現場で断熱サッシへの取替工事中の住棟と工事が完了した住棟を見学した後、管理組合修繕委員長から、自主管理時と管理委託後の管理組合組織、大規模修繕委員会の設立経緯からこれまでの経過、委員会としての作業についてご紹介いただきました。特に玄関ドア取替、断熱サッシ取替や資金計画および補助金利用の検討と合意形成の経緯、建物デザインと色彩計画決定の取り組みも管理組合で行われたとの説明がありました。

